

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 56

学校名・団体名	浜松市立引佐南部中学校
HPアドレス	http://www.city.hamamatsu-szo.ed.jp/inasananbu-j/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	日本一幸せな学校を目指して ～幸せを贈る子どもたち～
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>本校は「日本一幸せな学校」を合言葉とし、本校に関わる生徒・保護者・地域の方・教職員が幸せになることを目標としている。勿論、まだ学校内の活動は道半ばであり、「日本一幸せな学校」と呼ぶには不十分なところも多々ある。しかし、学校に関わる人を本当の意味で幸せにするためにも、幸せを贈る活動を学校内の活動と並行して行っていくことが、結果として子どもの成長をより促すのではないかと考えた。「日本一幸せな学校」を目指し、生徒会を中心とした子どもによる主体的な活動を通して、共生の視点をもった未来を担う子どもを育てたいと願い、このテーマを設定した。</p>	

「日本一幸せな学校 ～幸せを贈る子どもたち～」の具現化を図るため、カリキュラムマネジメントを生かしながら、以下の実践を行った。

(1) 引佐地区を活性化する活動を主体的に行うことで、引佐地区の人や引佐を訪れた人に幸せを贈る。

① 地域ボランティア

今まで行っていたボランティアを、「幸せを贈る」という視点から、地域へ幸せを運ぶ活動として捉え直した。昨年度までは地域の要請に応じて募集していたボランティアを、意義を伝えることで主体的な参加・活動と変容させたり、学校から地域等へ子供たちが活躍できる場面をお願いしたりした。



金指小運動会ボランティア

その結果、夏季休業中に行っていた1日保育体験やチャレンジボランティアに参加する生徒が増えるだけでなく、引佐地区の複数の幼稚園・小学校の運動会ボランティア、地元のフェスティバルボランティア（ふれあい in 奥山、金指フェスティバル、いなさ人形劇祭り等）への参加も増加した。

特に、本年度、10月28日に行われた本校周辺を会場に行われた「井の國 直虎祭り」では、受付・案内や舞台・会場の準備・片付けを行ったり、パレードにぬいぐるみを着て参加したりするなど、多くの生徒が裏方として活躍した。また、3年女子が体育で学んだ創作ダンス「いっ直虎」を披露したり、本校吹奏楽部が演奏したりする形で参加した。



いっ直虎創作ダンス(3年女子)



渋川つつじ祭り(吹奏楽)

本校生徒は様々な形で引佐地区の人や引佐を訪れた人に幸せを贈る活動を行ったが、その中でも特に吹奏楽部は、5月の渋川つつじ祭りを皮切りに、星空コンサート、川名フェスティバル、金指フェスティバル、社会福祉協議会・観光協会やライオンズクラブ主催のコンサート、少年野球大会開会式等、年間約12回程度のボランティア演奏を行うこととなった。

また、地元のお祭りだけでなく、10月の県の無形民俗文化財である横尾歌舞伎、そして1月に行われる国の重要無形文化財である川名ひよんどりにも、多くの生徒が参加を予定している。

② 出世大地蔵

年度当初、ある地域の方が本校グラウンド南側の川を挟んだ、高さ9m、横7mの巨岩に作られた出世大地蔵について相談したいと学校を訪れた。

約50年前、一等米が穫れる肥沃な水田に本校は建てられた。「そんな良い土地に校舎建設？」と反対だった人が、米を育てるのも子供を育てるのも同じ、米には肥料が、子供には愛情がいるという境地に達し、子供のためにと自費でこの巨岩を購入し、5年をかけて地蔵を完成させた。その思いが込められた地蔵が荒れ果てている。何とかしたいという相談だった。

6月以降、地域と卒業生への恩返しのチャンスととらえた生徒会が中心となり、地域の方やPTAとともに、立ち木や草を取り除き、足場を組んで高圧洗浄機でコケや汚れを取った後、ペンキで塗り直した。

卒業生や地域の方がとても喜んでくださった。「井の國 直虎祭り」でもリニューアルした出世地蔵を多くのお客様に見ていただくことができた。

中日新聞記事(2017. 9. 8 掲載)

校庭で活動する生徒たちを見る「ジャンボ出世地蔵」いずれも浜松市北の引佐南側

北区・引佐南部中生ら塗り直し

出世地蔵 表情はこきり

10年前にも化粧直ししたが、コケが付いたりペンキが薄れたりして見えづらくなっていた。10月末に学校の引佐総合体育館で開かれる「井の國直虎祭り」の来場者に見てもらおうと、八月二十六日あったPTAの清掃奉仕活動に合わせ、顔の塗り直しや周りの草木の伐採をした。

PTAが用意した足場に生徒会の有志が上り、薄くなっていた輪郭の線を黒色のペンキで丹念になぞった。生徒会長の三年松本頼和さんは「大地蔵に見守られながら学校生活を送ることができ、いい気分。不思議な力をもたらせて」と話した。(林知孝)

中野山にある巨大な岩に描かれた「ジャンボ出世地蔵」が、夏休み中に生徒や保護者の手できれいに塗り直された。新学期を迎えた学校を大きな半眼で見守っている。

一九七九(昭和五十四)年、地元の人らが生徒のために、校庭の南側の山肌にあった高さ九メートル、横七メートルの巨岩を露出させ、ペンキで地蔵の顔を塗り直した。風貌から校内では「天仏」と呼ばれていた。

見守られ 力もらえそう

地蔵の顔の輪郭をペンキで塗り直す生徒たち

(2) 日本に目を向け、東日本大震災で被災された方に幸せを贈る。(通年)

① 福島ひまわり里親プロジェクト

未曾有の被害をもたらした東日本大震災、その傷跡はまだまだ各地に残っており、未だ復興の途中である。しかし、その被害や復興に励む人々が数多くいることさえも、日々を追うごとに風化し、いつの間にか忘れ去られ始めている。未来を担う子どもたちは、引佐という地域を大切に作る視点をもちながらも、外を見る目が必要となる。



本校駐輪場前にある花壇のひまわり

本年度、本校は福島ひまわり里親プロジェクトに参画した。このプロジェクトは、東日本大震災の復興のシンボルとしてひまわりを植え、仕事が激減した障がい者を支援しようと始まった活動である。障がい者の作業所で袋詰めされたヒマワリの種を、全国の里親が購入・育成した後、新たな種を福島へ送り返す。その種は、再度、作業所でリパックされ、福島県内の学校等に無料配布され、復興のシンボルとして花を咲かせる。その花の種は、バイオエネルギーとして精製され、燃料として活用されている。



半田真仁氏 講演会

自分たちだけでなく多くの人を幸せにと、挨拶・掃除の合言葉を生かした「みんなで挨拶 南中 日本一幸せな学幸」をスローガンとする前期生徒会が中心となり、購入した種からひまわりを育て、その種を福島へと送った。また、11月にはこの法人の理事長である半田氏に来ていただき、講演していただいた。以下はある生徒の感想である。

今日の話聞いて、改めて被災地について知ることができました。僕は青森の八戸市に従兄弟がいます。僕は毎年、夏休みに訪れていました。2011年の夏に行った時、従兄弟の家は海から1kmもありませんが、手前の林のおかげで何とか津波の被害にはあっていませんでした。しかし、毎年行っていたビーチは電柱が折れて建物は崩れ、船が陸上に打ち上げられていて、とてもひどい状態でした。僕はその時、改めて津波の恐ろしさを知りました。

しかし、次の年に行ったら、がれきは残っていたものの、ひどい状態にあったビーチや海辺がほとんど元通りになっていました。被災地の復興力のすごさを知りました。でも、それはたくさんの人や会社からの支援があったからです。半田さんたちは、ひまわりの種を全国から送るということを通して、種を植え、咲いてくるひまわりで、現地の人々の心を明るく照らしました。

自分にできることはたくさんあると思います。そのうち、またどこかで災害は起こることでしょう。その時は自分ができるところをして助けていきたいです。

体育大会 応援 横断幕

また、3月11日に行われるひまわり甲子園には、半田氏が絶賛してくれた体育大会の横断幕の裏に生徒全員のメッセージを書いて、届ける予定である。



「日本一幸せな学校 ～幸せを贈る子どもたち～」の具現化を図るため、カリキュラムマネジメントを生かしながら、組織的な実践を生徒・保護者・教職員・地域とともに重ねた結果、多くの成長と感動・感謝があふれる学校になった。たとえば、10月には共同募金会会長表彰をしていただいた。また、問題行動だけでなく、いじめ・不登校の数も昨年度に比べて激減した。そして、学校評価のアンケートにおいて「本校は日本一幸せな学校である」は前年度が約40%であったのに対して、本年度は生徒・保護者共に約60%まで向上した。しかし、今回の実践によって向上したのかは不確定であるし、まだまだ否定的である生徒・保護者・教職員は少なくない。問題行動、いじめ・不登校は減少したが、0ではない。

今年度、様々な面で子供たちや学校が良い方向に向かったのは、保護者や地域の方が長年、子供たちに変わらぬ温かな愛情を注いでくれたからである。また、子供の成長歴にあった保育園・幼稚園・小学校・中学校の教職員の地道な教育活動あつてのことである。本当に有難いことである。来年度は、地域ボランティアの充実、福島ひまわり里親プロジェクトの継続、加えて「メイク・ア・ウィッシュ」の大野理事に講演していただき、「日本一幸せな学校 ～幸せを贈る子どもたち～」をさらに進めていく予定である。時代は大きく変革し、社会から教育に対する様々な要望が出される一方、教育現場には様々な課題が複合的に累積している。新学習指導要領により新たな指針が示されている。これらを踏まえうえて、今後も、様々な課題に適切に対応し、授業改善を含めた日々の教育実践の一つ一つを大切にするとともに、現状に満足することなく、教職員自身が成長するよう、努力を重ねていきたい。